

日本内分泌病理学会前理事長 故佐野壽昭先生を偲んで

日本内分泌病理学会理事長

成瀬 光栄

本年 2 月、日本内分泌病理学会前理事長の佐野壽昭先生が逝去されました。佐野先生は長年、徳島大学器官病態病理学講座の教授として、わが国における下垂体を中心とする内分泌病理学の分野において非常に大きな足跡を残されました。佐野先生は、本学会の前身である内分泌病理研究会の発足時から、その発展に尽力され、その後、現在の日本内分泌学会分科会である日本内分泌病理学会の設立に、献身的に取り組まれました。現在の本学会の基盤を作られた最大の功績者のお一人であります。内分泌病理学分野における佐野先生のご功績は、同じく本学会設立の功績者でおられる長村義之元日本内分泌病理学会理事長（現国際医療福祉大学教授）の追悼文に詳しく触れられています。私は昨年 10 月に佐野先生の後任として本学会の理事長の大役を申し付けました。私は内分泌病理研究会の時代から参加させて頂いており、内分泌病理学とその臨床的役割に大変興味を持っておりましたが、なんと申しましても専門外であります。また本学会の主役は内分泌病理を専門とされる先生方と考えておりますので、本学会の理事長をお引き受けするわけには行かないと考えておりました。しかしながら、最終的に引き受けさせて頂きました最大の理由は佐野壽昭先生のお人柄でした。佐野先生は必ず他人の意見に耳を傾けられ、その上で、ご自分のしっかりしたご意見を言われる方でした。物事の判断が客観的でかつ人間味あふれるお人柄は、私が専門外であるにもかかわらず本学会に長年お世話になってきた大きな理由でもあります。佐野先生が理事長の際に庶務担当をさせていただきましたが、いつも配慮ある対応に感謝し、尊敬の念を抱いておりました。

現在、日本内分泌病理学会は内分泌病理専門医の減少、会員数の頭打ち、学会の財務体質などいろいろ難しい環境におかれています。佐野壽昭前理事長の優しい笑顔と語り口を心に留め、先生の志を継いで本学会の発展に尽力したいと考えておりますので、会員の皆様の更なるご協力をこの場を借りてお願いさせていただく次第です。

最後に、佐野壽昭前理事長のこれまでの内分泌病理学と本学会への多大な貢献に改めて感謝申し上げますと共に、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

日本内分泌病理学会前理事長 故佐野壽昭教授を偲ぶ

日本内分泌病理学会 元理事長
日本内分泌学会 前監事・元理事
長村 義之

佐野壽昭教授が、日本内分泌病理学会の理事長として、これからの夢を語り、周囲からも大いに期待されていた矢先に急逝されてしまったことは、我々の学問の進歩には大きな損失でもあり、誠に残念に思います。亡くなられて既に4カ月近くたちますが、思い出すことも多く悲しい限りです。

佐野教授とは、いつ頃から親しくなったのか記憶にない程長いお付き合いをさせていただきました。特に内分泌学の領域では、共通の学問的興味をもっていた関係で、私の人生の中でも、最もお目にかかることの多い先生のお一人でした。中でも、日本内分泌学会の分科会である日本内分泌病理学会に関しては、その前身である日本内分泌病理研究会の発足当時から、献身的なご尽力をされました。佐野教授は、内分泌学の臨床の中のバックボーンとしての病理学・病理診断学の確立と普及に全力投球されており、彼の周りには、内分泌の臨床医、基礎医学者、学生など多くの方が集まっていたのを思い出します。

佐野教授とは、内分泌病理学の領域で、長い間切磋琢磨しつつ良き友人として一緒に歩んでまいりました。特に佐野教授が Toronto の Dr.Kalman Kovacs のもとで下垂体腫瘍の勉強をされ、帰国されてからは、下垂体という“小さくても偉大な臓器”に共通の興味を抱き、新しい知見を自慢しあうのが無上の楽しみでありました。国内外での学会研究会でもお目にかかる機会も大変多く、3年毎に開催される国際下垂体病理研究会では、海外で一緒して、楽しく“下垂体漬け”となって勉強致しました。佐野教授には、下垂体および内分泌腫瘍を通じて、国内は言うまでもなく、国外〔国際的〕にも多くの友人がおられます。北米の USCAP のコンパニオンミーティングとして開催される Endocrine Pathology Society の会長も務められ、米国で会長としてシンポジウムを主催され、大変好評でありました。佐野教授は、常に悠然と構えていて、笑顔を絶やさず、接するものすべてを魅了する魅力がありました。学問への情熱も人一倍であり、学会などでは厳しい質問を受けた人も多く、私もその一人でありました。しかし、彼を恨むものは誰もおらず、常に敬愛されていました。愛すべき友を失った大きな悲しみを皆様と共有いたしたいと思います。

2009年秋、佐野教授は国際下垂体病理研究会を学会長として淡路島にて開催される直前に、歯肉の腫瘍が発見され、意を決して手術されました。学会当日は、術後数日にも関わらず学会長としての激務を立派にこなされ、学会は国内外から大勢の下垂体病理のオーソリティーの出席者があり、大盛会でありました。翌年、かねてからの計画通り、ご自身の活躍の場を徳島から東京へ移され、東京に新居を構えて病理診断および下垂体研究に本腰を入れ始められました。がその矢先に、腫瘍の再発という事態に見舞われ再手術を受けることになりました。手術の結果、発声がかたくなりご不自由でしたが、気丈に内分泌病理に関する研究面での執筆に力を入れられ、その力強さに胸打たれました。しばらくは、大変御元気そうで皆安堵しておりましたが、病魔は急速に忍び寄り、2011年2月10日ご家族に囲まれて安らかに永眠されました。亡くなる前に時々入院先にお見舞いに行き、筆談でいろいろとお話し致しました。志半ばで病に倒れた無念さを、またご家族への深い思いを推し量るだけでも心痛みましたが、佐野教授は、最後まで笑顔を絶やさず明るく振る舞っておられました。

今年の秋は、国内外の学会で、“佐野壽昭記念シンポジウム”が企画されております。佐野教授の偉大な業績を忘れないという熱い思いが各地で展開されると思います。

佐野壽昭教授 内分泌学、内分泌病理学をはじめ多くの場での活躍長い間ご苦勞でした。
心より哀悼の意を表します。



Dr. Toshiaki Sano

It is with deep regret and sadness that we announce the untimely passing of Dr. Toshiaki Sano on February 10, 2011.

Dr. Sano was an international leader in the field of Endocrine Pathology and a Past President of the Endocrine Pathology Society. He published more than 200 papers on various subjects in that area. His true love was pituitary pathology and he was very active in the Pituitary Pathology Club, having organized its meetings in Hakone, Japan in 1998 and most recently in Awaji, Japan in 2009 when he was President of the organization. Dr. Sano was an extremely meticulous and observant scientist, a mentor to many young pathologists and students, and a warm and dedicated friend to many of his colleagues. As the Chairman and Professor of the Department of Human Pathology, University of Tokushima School of Medicine, he was a major force in ensuring high quality of pathology in Japan.

He will be sorely missed by his wife, Nobuko, his two children, and his many friends and colleagues throughout the world.

Sylvia L. Asa and Kalman Kovacs.

“Endocrine Pathology Society より許可を得て転載”